

山田みやこの活動報告

令和4年8月23日(火)

「性暴力を考える講座」に参加

主催 認定NPO法人ウィメンズハウスとちぎ

◎講座1 「子どもに対する性暴力～被害はどのように起き、どう回復していくのか～」

講師 齋藤 梓氏(目白大学大学院心理学研究科 准教授・臨床心理士)

1. 性被害はなぜ「性暴力被害」か

「境界線」=個人の安心・安全を守るためにからだや持ち物、気持ち、行動の周囲に引かれている目に見えない想像上の線

- 境界線は人それぞれで違う
自分の境界線、相手の境界線も大切に
同意なし境界線を侵害することは「暴力」的

性の境界線は

「いつ、どこで、誰と、どんな性的行為をするか」
「いつ、どこで、誰に自分の身体を見られるか」
それは自分が決めて良いこと。

性暴力とは、その人の意思や感情をないがしろにした性的言動、境界線を勝手に踏み越える行動で人権の侵害。しかし「性的同意」の概念が分からないと「被害」を「被害」だと認識することも難しい。

2. 性被害が起きるプロセス

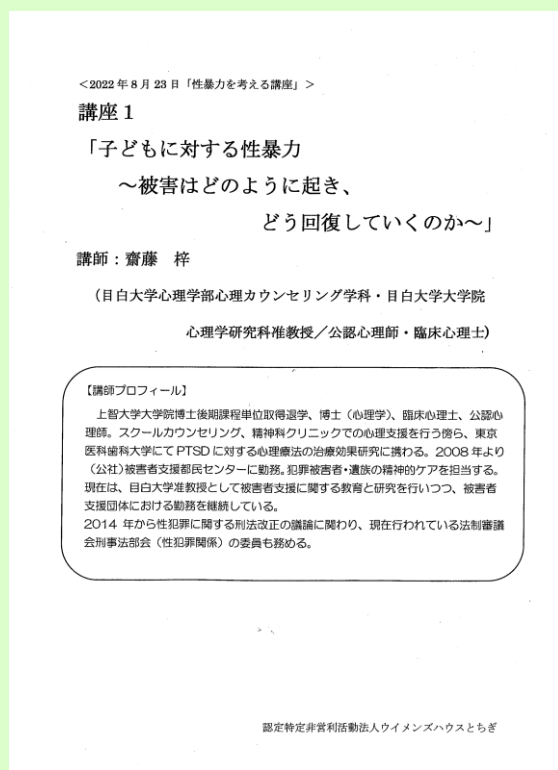
奇襲型、飲酒・薬物使用を伴う型、家庭内性暴力型、エントラップメント型に分類される。

エントラップメント型とは、日常生活の中で上下関係をつくる→逃げ道をふさぐ→性的会話→性交強要

3. 被害後のこころの反応

トラウマとは何らかの外的出来事により急激に押し寄せる強い不安で、個人の対象や防衛の能力の範囲を凌駕するもの。

- トラウマの反応として
身体的反応、精神的反応、生活・行動の変化、考え方の変化(非機能的認知)
- 子どもに起こりやすい反応
退行、赤ちゃんがえり(夜尿・夜驚)、一人で過ごせなくなる、ゲームに没頭、乱暴・反抗的
成績が下がる、不登校、自傷行為、性的問題行動
- 子どものトラウマを見逃さない
大人以上にトラウマ反応が見えにくい
大人が忘れさせようとすればするほど、子どもは一人で秘密や傷を抱える



4. 被害を打ち明けられたときに

- 敬意をもって接する
- 子どもの意見を丁寧に大切に
- 子どもの分かる言葉で説明する
- 不用意に身体に触らない
- レイプ神話が安全な相談を妨げることになる

5. トラウマインフォームドな支援

理解する、気付く、反応する、再受傷させない、傾聴、心理教育、セルフケア、つなぐ

6. 性暴力被害からの「回復」とは

気が付く→相談する・行動する・考える→それは過去のことになっていく

※回復するまでには長い時間と、話を聞く・信じる・否定せず受け止めるなど信頼関係を築き、あなたは悪くないというメッセージを常に伝えることが重要である。

◎講座2 「とちぎ性暴力被害者サポートセンター とちエールから見える性暴力」

講師 稲見 一美(済生会宇都宮病院 地域連携課 課長)

1. とちエールから見える性暴力

- 相談総数(2015年7月1日～2022年6月30日)
7年間合計 2,718件
〈2,158件(電話相談)、560件(来所相談)〉
令和2年から令和3年は前年比の2.5倍となり、声を上げやすくなった、またとちエールの認知が広がった。

- 被害年代 10代～20代 56%
- 被害時年代 10代～20代 51%
- 被害内容 強制性交 45%
強制わいせつ 29%
- 加害者との関係
家族関係 21% 学校・職場 14%
知人・友人 7% 交際相手 7%
配偶者 8% 面識なし 9%

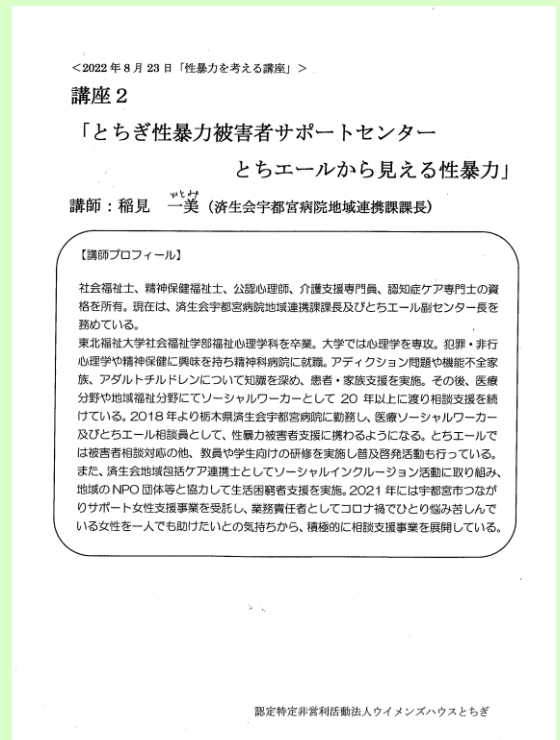
※13歳以上は暴行脅迫があり、いかに抗拒不能であったかを立証する必要がある。

2. 二次被害への配慮

- 気持ちを丁寧に聞き、そのまま受け止める
- 被害者の話を疑ったり否定せず、落ち度を責めない
- 無理に忘れさせようとしない
- 一方的に助言したり、話を進めない
- 共感したり、励まさない
- 「あなたは悪くない」とくり返し伝える

3. 宇都宮市つながりサポート女性支援事業

- 常設相談、地域相談窓口を設置
- 女性の抱える課題解決、解消に向けた関係機関につなげる
- 生理用品の配布



4. 誰一人取り残さない社会

性教育の必要性 ジェンダー平等 リプロダクティブ・ヘルツ/ライツ	}	加害者を作らない
--	---	----------

※とちエールの設置により相談・対処ができるようになったが氷山の一角。

☆エピソードの紹介

- 生理の出血でズボンが汚れていた女性にさりげなく自分の羽織っていたカーディガンを腰に巻いてと差し出した女性。
- カモの親がマンホールの上に1時間立ち続けていた。それを不思議に思い近づくとマンホールの下から子ガモの声が聞こえた。行政に支援をお願いしても断られ消防に依頼。やっとのことで3羽の雛が救出された。1時間ずっとマンホールの上で助けを求めて立っていた親ガモの思いを受け止めることで解決した。

命の安全教育が今、本当に必要だ。